

(1) 講座開催概要			
日時	令和4年7月27日 13:40~15:10	会場	大阪市立東成区民センター
テーマ	「私からはじめる 私たちの多様性社会」		
講師	公益財団法人 とよなか国際交流協会 三木 幸美 さん		

(2) 講座概要	
<p>「人権が大事なのはわかるけど、気にしすぎじゃない...？」時折そんな声を耳にします。2022年になった今でも、私たちが暮らすこの社会に差別は存在しています。そして差別に向き合うために必要なのは一人ひとりの「人権感覚」であるといえます。</p> <p>誰もが傷付けられることなく、また、傷付けることなく暮らしていくために、人権課題を学びほぐしながら考えてみたいと思います。</p>	

(3) 講座要旨	
<p>本日の話の流れ</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. マイノリティって誰のこと？ どこにいる？ 2. わたしの個人的な暮らし、社会との接点 3. 実践と公開と希望と実践と <p>マイノリティって誰のこと？ どこにいる？</p> <p>私たちの外国人イメージはいわゆる「白人」。一方、実際に日本に暮らす外国人の70%近く（豊中では約90%）はアジアの人（中国、ベトナム、韓国、フィリピン）。イメージと現実にギャップがある。マイノリティの姿は、私たちが頭の中で「作り出している」ものかもしれない。現実を知るには、自分が親しくしている当事者の話をしっかり聴くことだ。</p> <p>マイノリティが日本で暮らすのに大変なのは3つの壁があるから。まず「法律・制度の壁」。身分証明書の携帯義務や選挙権の問題など。二つめは「言語の壁」。情報格差の問題、日本語の書類を外国人を含む皆に「平等に」配布しても問題は解決しない。親子のコミュニケーションの問題もある。子どもが、日本語ができない親の通訳をさせられる。DVから逃げている親の通訳までさせられる。まさにヤングケアラーで、精神的な負担が大きい。最後は「心の壁」。ヘイトスピーチやレイシャルハラスメントなどの偏見や差別がある。これらはコロナ禍でさらに深刻になっている。まず「心の壁」からなくしていきたい。</p> <p>わたしの個人的な暮らし、社会との接点</p> <p>「三木幸美」歴は22年。生まれてから8年間は、三木幸美ではないPanggayan（パンガヤン/母の姓）として無戸籍・無国籍の状態だった。父親は日本人、母親はフィリピン人で幸美さんが生まれた時には在留期限が切れていた。当時は日本国籍を取得するためには胎児のうちに父親に認知してもらう必要があったが、これを忘れていた。そのため幸美さんは「いるのにいない」ものとされた。生活を守るためにはそうするしかなかった。病院に行くことも教育を受けることもできなかった。</p>	

幸美さんは被差別部落で生まれ育った。そこでは、障がいをもつ人、外国人など私とは「違う」人に対して、「自分に合う場所を探してください」と処理するのではなく、「今いる人たちでこの地域を豊かにする」ことが目指されていた。個人を変えるのではなく、個人の違いを飲み込んで社会が変わるということだ。地域で行われていた人権学習は「地域に暮らす人の人生を聞く」こと。目の前の人を通して、社会を見る・考える訓練となった。

今は「マイクロアグレッション」()という言葉がある。幸美さんが子どもの頃はこの言葉はなかった。そのため子どもの頃は何かモヤモヤしていた。「あの人外国人なのに礼儀正しいね!」「部落の人なのにこわくないよね!」などの言葉は、言葉が発生した瞬間だけの問題ではなく、言葉を投げられた人のこれまでの人生を傷つけ、これからの言葉を奪うものだ。

マイクロアグレッション

意図的か否かにかかわらず、政治的文化的に阻害された集団に対する何気ない日常の中で行われている言動に現れる偏見や差別に基づく見下しや侮辱、否定的な態度

幸美さんが明確な差別を経験したのは中2の時。幼馴染の男の子から「お前がなんでこんなところにおるねん」「お前ガイジンやろ、はよ国に帰れや」と言われた。実はこの男の子も外国にルーツのある子で、その子自身も同じことを言われていた。そのつらい気持ちが、より弱い幸美さんにぶつけられた。家に帰ると学校から母に連絡が行っていて、母に「ごめんね。私が母親でごめんね」と泣いて謝られた。幸美さんは思わず「あやまらんでよいし...」と言った。これまで、みんなと違うことを何とか薄めようとしてきたが、薄められるものではないことに気づいた。幸美さんが初めてアイデンティティを掴んだ日だった。

幸美さん自身が加害者になって差別してしまうこともあった。母には「言葉の壁」があった。日本語では情報の入手も、判断もできず、幸美さんが「やってあげなきゃ」ならなかった。幸美さんは「なんでできないの」「だから私がやらなきゃいけない」「どうせわかんないでしょ」といった言葉を母に投げかけてしまった。直ぐに母に謝ったが、取り消せたとはいっていない。今でも反省している。差別される人は作りたくない。差別する人も作りたくない。

母は差別されると笑っていた。子どもの時、幸美さんは「母はなんて強いんだろう」と思っていたが、そうではなかった。強くないと生きていけなかった。そうした母の笑顔の先に成り立つ共生は幸せなんだろうか？ 社会における自己責任論は「自立」を通り越して「孤立」につながる。

実践と後悔と希望と実践と

自分が差別の場に居合わせる可能性は常にある。その時にどうするか、事前に考えておく必要がある。幸美さんが中学の時、クラスで暴行事件があった。クラスにダウン症の子がいて、その子がひどい暴行を受けた。事件の後、暴行を受けた生徒の母親が「人の話を聴く」人権学習の講師として学校に来た。幸美さんは「怒られる」と思ったが、そうではなかった。「ありがとう」母親はそう言った。「息子はダウン症でみなさんに迷惑をかけている。今まで付き合ってくれてありがとう。母親として、この子には自分より先に死んでほしいと思っている」ということだった。幸美さんは暴行事件には加わっていない。言葉でのいじめもしていない。でも何もしていなかった。何もしないことは、何をしてしまったことなのか...？ もの凄く後悔した。ヘイト暴力のピラミッド(先入観による行為 偏見による行為 差別行為 暴力行為 ジェノサイド)は「昇りエスカレーター」で、何もしなければ、ど

んどん上にいってしまう。

「心を、言葉を、押し込める言葉」がある。「そういうのあんまり言わないほうがいいよ」「私はマイノリティとか気にしないよ」「あなたのために言っているんだよ」「私は差別とかしないから、考えなくて大丈夫だと思う」などだ。これらの言葉は「寝た子を起こすな論」に通じる。差別が残る社会で必要になるのは『いなくなる』姿勢だ。差別・暴力は「目に見える形で現れる『意識』」で、善意／悪意は関係なく、生まれながらの差別者がいる訳でもない。しかし寝ていたら、「いなくなって」いたら差別に気づくことも、差別に反論することもできない。みんなが「いなくなる」社会、「誰も寝かせない」社会が必要だ。カミングアウトする人は、「気にしないでほしい」からカミングアウトするのではない。一緒に考えてくれる／考えたいからカミングアウトするのだ。

自分とは異なる他者のことを「わかる人」「わかりたい人」を増やすことが重要だ。「わかる人」を増やすのは難しいので、まず「わかりたい人」を増やす。「わからへんし…」を「わかりたい！」に変えたい。また仮に差別してしまったとしても、反省して「やり直せる」社会にしたい。

ここから「やさしい日本語」の話をする。「普通の日本語よりも簡単で、外国人にもわかりやすく、高齢者・子どもにもやさしい日本語」のことだ。「非難 逃げること」「土足厳禁 靴をぬいでください」「飲まなくて大丈夫です 飲みません」などのように言い替える。「やさしい日本語」のポイントは3点。「音読みすることばはなるべく使わない(記入します 書きます)」「曖昧な表現は避ける(間違いではありません 正しいです)」「一文を短くする(朝起きたら、歯を磨いて顔を洗います 朝起きます。歯を磨きます。顔を洗います)。「罹災証明書」など、やさしくしたら伝わらない言葉(専門用語など)以外は、やさしい日本語を使ってほしい。(「罹災証明書」にもフリガナはつける)

とよなか国際交流協会の取り組みのテーマは「力を取り戻す」と「つながりなおし」だ。「困った時につながるのが大事」という意見があるがそうではない。人権は「ずっとつながるもの」だ。「始まり」と「終わり」を作らないことが大切だ。また人の暮らしに係わる仕事では、「自分の正しさ」だけに頼らないことも重要だ。「自分の正しさ」をいったん横に置いて話を聴く。人権を学び、社会の解像度を上げることで、人権は「制限」ではなく、より良い選択の根になる。「社会を引き受け考える」姿勢につながる。

ここにいる私の「態度」から、私たちの社会はつくることできる。「生き抜く術」ではなく、「生き抜く必要のない社会」を作って行きたい。